

の枚數なり、

〔嬉遊笑覽二上一〕昔は夜著なんど別に有は希なるにや、常の衣をかさねて著しこと、見ゆ、砂石集

八ある入道法師の物語に、小所領知行せし時の事かけず病者にて身冷云々、女童部が衣かさねて候が、猶肩ひゆる儘に、小袖を肩にかけて、足冷てわびしければ、小童部あとにねさせ侍りしが、所領得替の後、はひたすら暮露々々の如くにて、帷に紙袋きてねるに、足も身も冷す云々あり、ふすまは萬葉に敷裳とあるをもて、臥裳なりといへり、其狀はふすま障子といふにて、おもへば、今のかゝみ蒲團の如く、縁をとりたるにて、形は方なるなり、民間には多く紙ふすまを用ひたり、著聞集に、安養の尼のもとに盜人入たる處、尼うへは紙ふすまといふものばかりを引著て居られたりけるなど見えたり、紙被を今江戸の俗にはてんとくじと云、古に日向ほこりを天たうほこりといひし如く、日の暖なるをよそへて、天徳といふなるべし、天徳寺といひし寺ある故に、戯れてやしき物なれば、あらはに松月堂不角住吉奉納、三吟無一もつ後生願の猫かふて、千かぶる衾もいはざりしことい聞ゆ、天徳寺なり、泰西翁獨吟百韻、あらはれにけり、怪氣いさかゝる我戀は、やぶれ紙帳の中々に、塵塚咄元文二年に生れし老人筆記、一名飛鳥川と云歟、昔は夏近くなれば、紙帳賣冬になれば、てんとくじといふ物を商ひたるが、今はすくなしと云るは、賣ありきしならむ、向が岡延寶八夕立やあるが中にも紙帳賣といへるにて知べし、明和二年千柳點、紙帳うり塗師やに賣るがしまひなり、とあれば、此頃までも有しなるべし、

〔守貞漫稿十八雜服附雜事〕天徳寺 江戸困民、及武家奴僕、夏紙張ヲ用フ者、秋ニ至リテ賣之、是ニワラ

シベ等ヲ納レテ、周リヲ縫ヒ、衾トシテ再ビ賣之、困民奴僕等買之テ、布團ニ代テ寒風ヲ禦グ也、今ハ奴僕ハ用之歟、困民ハ不用之、又享保前ハ是ヲ賣歩行ク、享保以來廢シテ、今ハ見世店ニ賣ルノミ、蓋天徳寺ノ名據ヲ知ラズ、江戸愛宕山下ニ天徳寺ト云禪寺アリ、コ、ニ因アル名歟、此物京坂